懐かしの杉本町から我孫子町へ

とおい昔の話になるが、1971 年 4 月に大阪市住吉区杉本町で下宿生活をはじめた。なんとか信州大を卒業し、大阪市大の大学院進学を目ざすためだ。写真上の倉庫と空き地の間の奥、平野さんというお宅の一角、2 階建て「土蔵」1 階端の狭い部屋だった。下宿近くのパン屋さんの公衆電話から、宮本憲一先生の研究室に電話して、ゼミに参加させてほしいとお願いした。先生の「いいよ」という言葉により、「もぐり聴講」させてもらうことに。

当時、親から大学院進学を反対され極貧であり、正規の聴講生にはなれない「金欠」状態だった。毎日のように、塾や家庭教師などのアルバイトに励み、なんとか収入を確保した。家庭教師のお宅で、たまに夕食を頂戴して食費を切り詰めることができた。下宿のおばちゃんには本当にお世話になった。2 年にわたる苦難の浪人時代には、なにかと激励してもらった。合格したときには、一緒になって涙を流して喜んでくれた。

大学院では修士論文を書きながら、共同研究の事務局などをつとめた。塾や家庭教師のアルバイトを継続したが、日本育英会奨学金を貸与できるようになった。現在、奨学金が社会問題になっているが、当時は「返還免除」の規定があった。大学などの教育職に一定期間つけば、奨学金返済が免除された。なんとか就職できて、奨学金では本当に助かった。奨学金でなんとか研究生活を継続できた。

博士課程に進学したとき、「縁」あって結婚することになり、下宿を出て我孫子町駅前のマンションに引っ越しをした。写真は『目で見る大阪市の 100 年』下巻掲載、昭和 40 年代の阪和線「我孫子町駅」。この駅舎には見覚えがある。天王寺方面には踏切を渡って、反対側のホームに行かなくてはならない。電車が来ているのに、乗れないことを思い出す。いまは高架の駅になって、その心配はなくなった。

写真下の我孫子町駅の方から眺めた 4 階建てのマンションがわが家。酒屋とパチンコ店、そして酒場がいくつもあり、とにかく騒がしく「誘惑」の多いところだった。マンション 1 階には「八百」という中華料理店があった。その上の 2 階のわが家まで、中華料理の臭いが立ち上ってくる。そんなマンションでの甘くもあり、辛くもあった「新婚生活」だった。

浪人時代から住んだ下宿とは違って、こうしてマンションが残っているのは、当時の記憶を思い起こすうえで、ありがたいものだ。

(2018 年 5 月 29 日)